

令和5年度

宮崎市総合教育会議

会 議 録

令和5年度 宮崎市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和5年12月22日（金）15：30～17：00
- 2 場 所 宮崎市役所本庁舎4階 特別会議室
- 3 出席者 清山市長

【教育委員会】

西田教育長、松尾代表教育委員、片山教育委員、小林教育委員、高峰教育委員

【事務局】

迫田教育局長

長嶺企画財政部長

（企画総務課）河野課長、砂田課長補佐、堀課長補佐、甲斐主査、小八重主任主事、  
中村主事

（学校施設課）齋藤課長

（学校教育課）重盛課長

（教育情報研修センター）堀之内所長

（生涯学習課）長田課長

（保健給食課）弓削課長

（文化財課）町田課長

（企画政策課）勢井課長、上口課長補佐、野脇主任主事

- 4 傍聴者 2名

- 5 意見交換

テーマ「宮崎市における不登校支援の在り方について」

(会議録)

堀企画総務課長補佐	ただいまから、令和5年度宮崎市総合教育会議を始めさせていただきます。はじめに、会議の主催者である清山市長がご挨拶します。
清山市長	<p>本日は、宮崎市総合教育会議にご出席いただき誠にありがとうございます。また、日頃より、教育行政、本市の市政全般にわたりご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。既にご承知のことだと思いますが、この総合教育会議は、市長部局、市長である私と教育委員会が、共通の教育課題や方向性を共有して、共に連携して教育行政を推進していくための設置ということで、今回で11回目の開催となります。</p> <p>今回は、特に本市の不登校についてテーマとして取り上げさせていただきたいと思っております。ご承知のように本市の不登校児童生徒数はここ数年数が増えておりまして、それぞれのご家庭が抱える課題・悩みも深刻なものとなっております。そこにどう対応していけるのかということで、様々意見交換をさせていただき、また連携して取り組むことができればと思っておりますので、本日はどうぞ忌憚のないご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。</p>
堀企画総務課長補佐	<p>ありがとうございました。それでは、本日の会次第についてご説明いたします。本日は17時までの一時間半、清山市長、永山副市長、西田教育長、教育委員の皆様7名で意見交換を予定しております。それでは、ここから意見交換に移させていただきます。</p> <p>ここからの進行は、清山市長にお願いいたします。</p>
清山市長	<p>それでは、ここからは私が進行役を務めさせていただきます。</p> <p>まずはじめに、今回のテーマを「不登校支援の在り方について」とさせていただいた趣旨について、私から説明させていただきます。</p> <p>先ほど、不登校の児童生徒数が年々増加傾向にあると申し上げましたけれども、その要因や背景については、本当に複雑化・多様化しており、やはり全国で課題、原因、どういう因果関係でそうなっているのかというのは、単一の答えが見いだせてない状況というのは全国同じかと思っております。</p> <p>先日、市内の中学校を訪問させていただきましたが、そこでも、学校の先生、それからスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの方々もかなり苦慮している状況もあるというふうに聞きました。そのようななか、国においてはやはりこの課題を重視し、こども家庭庁では、こどもまんなかの趣旨に賛同する自治体や企業を募集するというので、宮崎市もそちらに賛同して、「こどもまんなか応援サポーター」宣言をさせていただきました。政府と歩調を合わせて、不登校対策、不登校になってしまった後の対策もそうですし、そうなってしまわないような対応・対策というのも重要かと思っております。</p> <p>教育委員会や学校現場ではそれぞれご努力いただいている、校内の教育支援教室であったり、校外の教育支援、さらに、フリースクールと色々な形で学校に通えなくなった子どもたちの学習、教育の保障というのをさせていただいておりますが、本当に増え続ける不登校の児童生徒に対して、追いついていないような状況</p>

	<p>もあろうかと思っております。</p> <p>本市としてどう効果的に対応していくべきか、そうした課題や今後の方向性を議論、意見交換することができればと思っております。</p> <p>視点としては、新たな不登校を生まないような取り組みはどういうことがあるのかという点。さらに、学びの機会や居場所づくりという点です。ご家庭も多様化しており、ひとり親の家庭も増えております。そうしたご家庭の子ども達にとっての居場所づくりや不登校になってしまった後の居場所づくりも重要かと思えます。さらに、支援が届いていないような児童生徒、家庭への支援等、本当に幅広い視点が必要かと思えますが、自由にご意見いただければと思えます。</p> <p>それでは、宮崎市における不登校支援の在り方について、教育委員会の取組を教育長から説明をお願いします。</p>
西田教育長	<p>まずはじめに、市長及び副市長には、教育に関して関心を高く持ちいろいろと支援をしていただけて感謝申し上げます。</p> <p>本日は不登校に関する支援の在り方ということで、不登校の状況、対策、今後の方向性ということで説明させていただきたいと思えます。</p> <p>2ページを見ていただきますと、不登校児童生徒数の推移として全国の状況을載せております。全国では約29万9,000人と過去最多になっております。このグラフを見ると平成29年がそれまでと比べて増えています。この平成29年は、教育機会確保ということで、不登校を問題として捉えるのではなく、立ち直る機会という捉え方になったというようなことがあります。これ以降、不登校児童生徒数が飛躍的に伸びている状況です。これは、本市においても同様で、今後さらなる増加が予想されております。</p> <p>では、その要因について、国としてどう捉えるかということになりますが、令和4年度不登校児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査(文科省)では、「無気力・不安」というのが52.2%となっています。「生活リズムの乱れ・遊び・非行」というのが10%台ということで、6割程度が要因がはっきりしない本人の部分であるというようなところがあります。これに対しては、具体的にな方策、的確な何かがあるから解決できるという解決策がなかなか見当たらない、難しいという状況であります。</p> <p>ただ、スライドの3～4ページにあります、令和2年度不登校児童生徒の実態調査(文科省)で、不登校児童に聞いた「最初に学校に行きづらいつ感じ始めたきっかけ」では、学校に関する部分、最も高かったのは、「先生のこと」の29.7%で、「先生と合わなかつた、怖かつた、体罰があつた」という結果が出ております。スライドの一番左側は友達のこと、嫌がらせとかいじめがあつたとか、そうした回答が多いような状況になっていってます。また、勉強が分からないというのも、4番目にきています。</p> <p>一方、スライドの右側の方を見ていただくと、先ほどの令和4年度の調査結果と同じように、体調の不調とか、生活リズムが乱れ、そしてインターネットゲーム依存とかいうような部分での、個人的要因というのが見えてきます。また、右</p>

から3番目にありますように、きっかけが何か自分でもよく分からないというような子ども達も結構多くいるという状況であります。

このような状況において、国ではスライド5ページにありますように、誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策「COCOLOプラン」を令和5年3月に発表しました。

大きなポイントは、一つ目にありますように全ての児童生徒の学びの場を確保して学びたいと思ったときに学べる環境を整えるということです。スライドにありますように、不登校特例校や、本市も実施しているような校内支援教室といったものを設置するというものです。二つ目に、心の小さなSOSを見逃さず、チーム学校で支援するということ。三つ目に、学校の風土の見える化を通じて学校みんなが安心して学べる場所にするといったことがあります。

この三つは、現在不登校になっている子ども達への対策、不登校という状況を作らないための対策というふうに捉えることになるかと思えます。本市の状況についても、その視点で説明させていただきます。

スライドの6ページです。新たな不登校を生まない取組として、魅力ある学校づくりという推進の部分でQUアンケートというものがあります。これは、子ども達に人間関係に関するアンケートを取り、先生達がそれを分析しながら、子ども達に対応していくというものです。それから、やはり基本は授業になります。授業時間が学校で最も長い時間になりますので、授業改善をしていこうということです。また、スクールワイドPBSというのですが、これは積極的な行動支援ということで子ども達の良い部分を積極的に褒めていくという、その視点を教員間で合わせるというような取組です。現在、概ね16校で取り組んでますが、先生方もこの取組を通して、子ども達の自己存在感を高めるという意味で意義があるというふうに捉えているようです。

また、相談窓口の充実ということで、市教育相談センターのほか、心つなぐライン相談ということで市全体で取り組むという状況です。

次のスライドをご覧ください。不登校児童生徒の教育機会の確保についてです。まず、不登校児童生徒の教育機会の確保を、三つに分けて考えると、一つは、学校にいても教室に入れないということ。そして、学校に登校できないということ。最後に、家から出られないという三つの場面でどう対応していくかといったことを主に現在取り組んでいます。

こうした取り組み方で良いのかどうか、今年度、不登校支援の在り方協議会を通じて、新たな支援対策に取り組んで参りたいというふうに今話を進めてるところであります。

それでは、8ページでは、実際どのような整備を行っているかということの説明いたします。校内支援教室の設置が10校、校内に設置しながら、児童生徒の受け入れを行っております。これ非常に評判が良いです。

それから、フリースクール等の出席扱いということで、フリースクールに通っている子ども達を出席として認めるというガイドラインを出しております。

	<p>また、教育支援教室の拡充という部分でいうと、本年度からサテライト教室を設置しました。小戸教室のサテライトとして、神宮と里山に設置しています。里山の方は小学校の子ども達ばかりですが、昆虫と遊んだりとかそういう活動もして、子ども達にとっては非常に居心地のいい形になっているようです。</p> <p>続いて次のページです。人的配置ということで、本市として3名のスクールカウンセラーに活躍いただいています。それから、スクールソーシャルワーカーが6名。スクールアドバイザーが11名おります。スクールアドバイザーというのは教育支援教室の指導員になります。他には、タブレットの活用等しながら、不登校対策を進めているという状況です。</p> <p>次のスライドは、今後の方向性ということで広くスライドには載せておりますが、子ども基本法も施行されました。そうした中で、様々な問題が絡み実態が掴みにくい中で、全体的な取組としてやっていく必要があるのではないかとということで、本日も市長部局の各部長さんもお出でいただいています。学校の部分ということでは、この水色の部分にあたりますが、ここ以外の広い範囲内で、支援が取れていない子ども達に、今後どのように関わっていくかということが大きな課題になってくるだろうというふうに捉えております。</p> <p>そうした中で学校側で取り組まなければいけないこととして、小さなSOSを見逃さない支援体制、やはりチーム学校、組織として子ども達が安心して学べる場所にしていくということが一番大切であるということです。具体には、スクールワイドPBS拡充と魅力ある学校づくりの手引きというのを現在作成しております。それから、オンライン相談を増やしていきたいということです。また、教育機会の確保ということでは、学びの多様化学校の研究も進めているというところであります。</p> <p>次のページになりますが、支援が届いていない児童生徒はどうするかというところで、学校運営協議会の中でも、中学校25校区のうち3校区は、不登校支援についての協議がかなり深まりつつあるところです。また要保護児童対策地域協議会、虐待等を中心とするんですけれども、そういうようなところとの協議の場も学校として持てるようになりました。</p> <p>それから、ひきこもりネットワーク連絡協議会というような部分で、今後この活動が活発になりながら、ひきこもりのサポーター等の要請ができてくると、様相も変わってくるのかなと思います。現状では情報の共有をしっかりとっていくという段階だと思います。</p> <p>こうしたことも含め今後しっかり取り組んでいきたいというふうに考えております。以上です。</p>
清山市長	<p>ありがとうございます。それでは、次に市長部局の取組について、各部局から説明をお願いいたします。</p>
田村福祉部長	<p>福祉部長の田村でございます。よろしくお願いたします。</p> <p>実施しております事業について、まず、子どもの居場所づくり事業及び支援について説明をさせていただきます。まず、子どもの居場所づくり事業コラジヨ</p>

	<p>では、生活保護世帯、それから生活困窮世帯との中学生高校生、若年層の不就学・不就労者を対象として、週2日学習支援、居場所の提供を行っているところでございます。実施内容のところでございます学習支援につきましては、教職員OB4名を配置して、個別学習、個別の学習支援を実施しているところでございます。</p> <p>また、高校生等につきましては、学校訪問を行いまして、課題解決に向けた対応策を学校と一緒に協議するなど教育委員会とも連携しているところでございます。居場所づくりの部分で月1回程度、学習以外の部分でスポーツや社会見学等を実施している状況でございます。支援の状況としまして、令和4年度実績が中学生が42名、高校生27名、不就学不就労者が5名、計74名に支援をおこなっております。なお、中学3年生につきましては全員が高校に進学しているという状況でございます。また、不登校状態の中学生が参加した場合の、いわゆる出席扱いというものが、平成31年から出席扱いとしておりまして、対象者が、28名、参加日数が822日となっております。</p> <p>次にスライド2ページをご覧ください。こちらは、子ども支援員についてでございます。こちらは、生活保護世帯、それから生活困窮世帯の中学生高校生、若年層の不就学不就労者とその保護者を対象として、社会福祉第一課に会計年度任用職員を2名、社会福祉士の資格を有する者を配置して、不登校やひきこもり、将来とか進学資金等の課題に対して、家庭訪問、アウトリーチ等行いながら、保護者と子どもと信頼関係を築き支援に介入していくという状況でございます。保護者に対する養育支援や奨学金それから貸付金、オープンスクール等については同行支援も行っております。また、福祉部と学校その他の関係機関とのつなぎの役割を果たすということも行っております。</p> <p>実際に支援の状況としましては中学生が28名、高校生35名、不就学不就労者8名、計54世帯、76名を支援しているという状況でございます。</p> <p>以上でございます。</p>
清山市長	では続いて、子ども未来部からお願いいたします。
富田子ども未来部長	<p>子ども未来部から説明いたします。</p> <p>まず、子育て支援課の方でひとり親家庭等学習支援ボランティアを行っております。概要としましては、ひとり親家庭の小学3年生から高校3年生に対して、教員のOBや大学生のボランティアによる学習支援や進学相談等を行っていたくものです。NPO法人に業務委託しております。利用者の中には、不登校の児童生徒もいらっしゃいます。令和4年度の実績でございますけれども、市内3か所で実施しておりまして、錦町のグラードで週2回、その他に宮大と公立大でそれぞれ週1回実施しておりまして合計210回の学習支援を行ったところでございます。登録者数としましては69名となっております、その利用者の保護者の方からの相談件数は686件ございました。相談の多くは、高校進学に伴う入試のことだったり、奨学金に関するものが多い状況でございました。</p> <p>次のページをご覧ください。</p> <p>子ども家庭支援課の家庭児童相談事業でございます。概要としましては18歳</p>

	<p>未満の子どもの育児の悩みや不安などについて相談に応じておりますが、中には子どもの不登校に関する相談にも対応しております。不登校については様々な要因が考えられますので、保護者とともにも不登校の原因を探り、子どもへの声掛けの仕方や、生活リズムの取り方など必要な助言を行っておりますが、また必要に応じて学校やスクールソーシャルワーカーと情報共有を図らせていただいております。令和4年度の家庭児童相談件数が1,174件、そのうち不登校を主訴とする相談が27件でございました。</p> <p>以上でございます。</p>
清山市長	<p>続いて、健康管理部お願いいたします。</p>
袈裟丸健康管理部長	<p>健康管理部長の袈裟丸でございます。</p> <p>健康管理には健康支援課という課がございます。そこに、心の健康係という係がございます。その係が中心となって市民全体の悩みですとか心の不調がある方への相談などを行っております。また、児童生徒や教職員への心に関する啓発といったことをやっておりますので、その事業についてご説明をいたします。</p> <p>まず、資料の1ページ目になりますけれども、健康支援課ではこれまで電話ですとか来所での様々な相談を受けておりましたけれども、今年8月1日からSNSのLINEを活用した「心つながりライン相談」という相談事業を開始し、体制の充実を図っているところでございます。LINE相談では、資料の左下にありますように、これまで長期休暇の終了前後の二週間程度、教育委員会が行っていた事業を全市民を対象に拡大して、年中無休で対応するというような事業になっております。具体的には、LINEでのアプリを活用して、様々な心の悩みに、委託をしております業者の精神保健福祉士や臨床心理士など専門の相談員がLINE上でやりとりをして相談にのっていくというものになっております。相談は年中無休で19時から24時まで、匿名で相談ができます。小中学校の長期休業終了前2週間程度は時間を延長して、17時から相談が受けられるようになっております。資料の中ほどに、今年の4月から11月の相談実績を載せておりますけれども、小中高校生からの相談につきましては、138件ございました。そのうち見ていただくとわかりますように、女子児童生徒からの相談が8割を超えているという状況がわかります。あと、相談内容を右側に載せております。相談内容は複数回答になっておりますけれども、家族に関する事学校に関する事というのが多くなっております。</p> <p>次のページをお願いいたします。この左側は、LINE相談電話が、実際もし何か緊急を要することがあった場合にどうなるかというものを図示したものになります。まず委託先からは健康支援課に定期的に状況報告がっておりますし、関係機関の中でも特に学校教育課とは連携を強化しております。万一、本当に急を要するような案件の相談があった場合になりますけれども、委託先の総代の方から健康支援課の方に連絡が入りますので、健康支援課から警察、児童相談所等々に情報を共有する対応をして、必要に応じて関係機関に照会をかけるという流れを書いております。これまでのところは、そこまで至ったケースはあり</p>



	<p>ません。また、現時点で個人情報把握して外部と連携している相談案件もありません。今後も引き続き教育委員会をはじめ関係機関と連携して、この事業については継続して実施をしていきたいと考えております。</p> <p>また、相談事業以外では、子どもの心を守るための取組としまして、小中学生や教職員、保護者向けの事業を行っております。</p> <p>まず一つ目のSOSの出し方教育ですが、ストレスのサインですとか悩みを抱えた際の適切な対処方法を学ぶ教育機会をごさしまして、市内の中学生に行っております。令和4年度の実績で行きますと20校ということで全中学校にはなっておりませんが、本年度は教育委員会とも連携して早めに学校に呼びかけを行っておりますので、25校全校で実施をする予定となっております。現時点で23校終わっている状況でございます。</p> <p>二つ目が、子どもの心の変化に気づいて教職員が声かけしたりすることができるようなゲートキーパーになっていただくという、ゲートキーパーを養成する教職員向け自殺予防研修を行っております。こちらは昨年度実績で22校となっております。市内の小中学校が72校ありますので、毎年全ての学校に実施するのはなかなか難しいので、小学校を昨年度と今年度の2年に分けて、来年度は中学校ということで、中学校には3年に1回研修をしていくという組み立てを行っております。</p> <p>最後に、市のオリジナル啓発パンフレットをお手元にご準備しております。夏季休暇前に小学校5年生、中学校1年生とその保護者の方にパンフレットを配布しております。内容につきましては教育委員会と相談しながら進めておりますので、今後も引き続き実施してまいりたいと考えております。</p> <p>また、資料はございませんが、心の問題を抱えている児童生徒が地域で生活していますので、そうした見守り支援が必要な場合は、健康管理部の地域保健課という部署で地域として見守りや訪問をしたりといった支援をしておりますので、ご紹介しておきます。</p> <p>説明は以上です。</p>
清山市長	<p>ありがとうございます。それでは、意見交換に入りたいと思います。それぞれ説明がありましたけれども、冒頭申し上げたように、宮崎市における不登校支援の在り方について、三つの視点、新たに不登校を生まない取組、そして、学びの機会・居場所づくり、それから支援が届いていない児童生徒への支援がどういったところにあるのか、また何をすべきかといった点を中心に、ご意見をいただけるとありがたいのですが、いかがでしょうか。</p> <p>はじめに教育長にご紹介いただきましたけれど、全国の状況ありましたが、宮崎市内の不登校の状況いかがでしょうか。</p>
西田教育長	<p>状況としては、小学校が全国よりも割合としては少ない状況で、中学校になると多くなっているところで、合わせると1,000名程度という状況です。</p>
清山市長	<p>昨年度1,000名を超えたということでしたよね。</p>
西田教育長	<p>そうです。</p>

永山副市長	数値は4年度までですが、5年度はどうでしょうか。
西田教育長	現状で明確な数字はでていませんが、上がってくるのではないかと思います。
清山市長	教育委員の皆様も何かご意見または市長部局の取組についても何かありましたら、いかがでしょうか。
松尾代表教育委員	<p>先ほど、不登校の原因・要因というところで、学校からの報告では無気力・不安というところに集中した数字が出ておりましたが、裏返せば、安心できる学校にしていかなければならないのではないかと思います。気力が沸くような、今日はこれがあるから楽しいというような、子ども達にとってどうしたらそうした場になっていくかということ点を点検して、日々の取組を振り返っていかなければいけないのかなという気がいたします。</p> <p>その中には、教育長の説明にもありましたように授業が大半の時間を占めるということからして、やはり授業が楽しい時間になっているということも振り返っていかなければいけないのかなと思います。あるいは、学級生活、人間関係が非常に大切になってくるかと思しますので、学級における存在感や思慮的な風土があるかどうかということもあります。これは担任の先生の学級経営の関係もありますので、先生の温かい人間性に触れたり、めりはりのある指導ということが大切になってくるかなと思います。</p>
小林委員	<p>一週間前に、地域・家庭・学校と教育委員会との意見交換会というものがあまして、そこでいろいろな方とお話したのですが、その中に保護者代表で、市のPTA協議会の松本会長と持原副会長がいらっっしゃいました。そのお2人の意見がすごく印象的で、「学校は楽しく輝くところですよということだとか、ぬくもりを感じられるそんな学校であって欲しいんだと、それが一番の願いなんだ。」とおっしゃっていました。先ほど代表委員もおっしゃったところですが、そのためには何ができるのだろうと考えた時に、今年3月に教育振興基本計画が新しくなり、そこには二つのコンセプトがのっています。その一つが Wellbeing になっています。この間に私も調べたのですが、もともと1946年の古いところからWHOの歴史もあるようです。たまたま家庭でも話をしていて、Wellbeing という概念があるという話になった時に、妻はもともと看護師なので、「医療とか福祉では昔からある概念だ。」ということをつぶやいたものですから、やはり以前から大切とされている概念だという話でした。</p> <p>一方でそのことを改めてなぜ教育の場で、これをどうにかせるのかなと考えた時に、やはり居場所のある、そうした学校づくりという考えていくと、子ども主体の学校を改めて考えるべきなのかなと思います。子ども達が学校に行くのが楽しい、自分ことが認められるということのためには、児童会とか生徒会が主体的に行事を展開するような活力がみなぎっているというような学校、実際そのような学校もいくつもあると思うんですけども、改めてそういった視点で見るとか、先ほど代表委員がおっしゃったように、授業という点でいうとアクティブラーニングとよく言われますけど、やっぱり子ども達が自己肯定感といったことを感じられるような、そんな授業展開を改めてもう一度考えてみましようといった</p>

	<p>メッセージなのかなというふうに思いました。</p> <p>もう一つ別の視点で言うと、環境経営、環境づくりだと思います。よく学級経営のことで、私も学生と話をして、授業とか集団経営、事務経営も大事だけど、学級の環境をいかに心地よい場所にするかそういった視点が大事なんだと、もう一度学校そのものを見つめ直す大切な機会を与えていただけるんじゃないかなというふうに思って発言いたしました。</p>
清山市長	学級の環境づくりというと具体的にどのようなことでしょうか。
小林委員	例えば学校の掲示物もそうですし、例えばゴミが散らかってるとか、そういったちょっとしたことをやはり敏感に感じられる先生、先生だけではなくて子ども達も、例えば画鋸が一個落ちていたら、何か外れてるんじゃないかな、そんな感覚をお互いが、先生たちと子どもと一緒に磨きあっていく、そうした環境経営といった視点でお話しました。
清山市長	ありがとうございます。いかがでしょうか。
片山委員	<p>お二人の委員のお話から、新たな不登校を生まない取組に対するお話があったので、私もそのことについてお話ししたいと思います。やはり私が学校の支援訪問をさせていただいた時に、私がいつも大事に思っているのは、肌で感じるということ大切にしています。先生達がどれだけ楽しく授業をしているか、子ども達がどれだけ楽しく授業を受けているかというのをいつも見させていただいています。いつも学校の玄関に入っていつも残念だなと思うのは、職員室が暗いというか怖いというか、入りにくいというものがすごく感じられます。やはり子ども達にとって、学校は魅力的であるとか楽しいというのは、安心安全である、ここは自分達にとって安心安全であるっていうことがもう大前提なので、先生達に相談できる雰囲気であるとか、何でも本音で話せるという環境を作っていくというのが、人と人という環境も含めてですね、考えていかないといけないのかなというのは本当に思っています。</p> <p>そんな中で、この宮崎市はスクールワイドPBSという視点で取り組んでいたところですが、その成果として、先生方が児童生徒を褒めるだとか先生に相談できるようになったというのが、成果として見えていますので、これは本当に72校全てでそういう取組、先生達の意識の変化というところを宮崎市をあげて取り組んでいけたら素晴らしいと思います。やはり子どもは未熟ですけども、私達大人がそういう環境を作っていってあげないと、なかなかそういう声はあがってこないのかなと思います。やはり指導される、先生に言えないという環境から、家庭のように安心で安全な状況を作っていくというのが、一番子ども達にとって不登校を生まないということになっていくのではと感じたところで</p>
清山市長	ありがとうございます。今職員室についてありましたが、教育長何かありますか。
西田教育長	今学校が相当忙しくなっているかと感じています。子ども達が授業の中でどう動くか分からないから職員室に帰れないとか、小学校でもそうした状況が出てき

	<p>ているのも背景としてはあるかと思えます。寄せられる様々な要望、子どもの状況または保護者への対応等ある中で、あくせくしている状況が見えます。ただ、そうした状況でも皆が頑張っていける環境にしたいと考えています。</p>
清山市長	<p>ただ、それも余裕がないと明るくならないのではないのでしょうか。気持ちにゆとりがないとなかなかですよ、いかがでしょうか。</p>
高峰委員	<p>今日ちょっと不登校について話したいポイント二つありまして、まず一つお話しします。先日、不登校をテーマにした意見交換会がありました。私は、産業畑の人間で、今年の秋から教育委員として務めさせていただいています。今回、不登校というものについて、自分の頭で考えるという機会をいただきました。</p> <p>まず、私が小さい時の話ですが、学校を少し休みがちな子どもでした。それには目的があって、本を読みたい、将来作家になりたいという思いで、潜り込んで本をひたすら読んでいたというのが小学校中学校ぐらいまでずっとありました。高校に進学したら、少し学校もいいんだなと思えて、論文で大学に入りました。やはり今考えると、私にとっては、学校に行かなかった時間が自分を作っている、文字が自分を作ったと思っています。</p> <p>ただ、今でも学校行ってたらどうだったのかなというのは考えますし、多分学校に行くのはベストだと思います。ただ、行けない子どもがいて、行かない選択をした子どもがいるということです。いかにその時間を、不登校の子ども達の選択を豊かにしてあげるのかということだと思います。私は、自分の休んでいた時間は良かったというふうに思っています。今振り返って少し問題だったのかなと思うぐらい、私の中では全く自分に対する自己肯定感というのも下がってないまま大人になりました。それを、先日の意見交換会の時に、「それはおそらく高峰委員に対する学校と保護者の教育方針がかけ違っていなかったのではないのでしょうか。」と言われました。そこで、なるほどと納得したわけです。</p> <p>行くのがベストだとは思いますが、行かない選択をした子どもは、やはり何か思うところがあって家にいる、学校に行かないと思ってるかもしれないので、いかにその時間を豊かにしてあげるかということを考えていきたいと思っております。</p>
永山副市長	<p>先ほど授業が大事だという話がありましたが、この間、宮崎小学校の自由進度学習を視察させていただいて、実践されてる先生方とディスカッションをしました。一番印象的だったのは、子ども達の自己肯定感が非常に高いということと、特に通常の授業ではなかなか肯定ができないような子ども達が、それなりの肯定感を持って授業に望んでいるということがすごく印象的でした。</p> <p>やはり授業をどう進めていくのか、その中で子ども達はその場所にいることの意義みたいな、一人一人の意義がどれだけ感じられるかっていうことをしっかりやっていくことが必要なんだろうなと思いました。その中で教育長から、全校生徒600人程度の愛知県の緒川小学校では不登校がゼロだと、その小学校の校長先生をフォーラムで招いて、校長先生から学んだと話がありました。その学校の不登校ゼロの一番大きな要因というのは、なんなのでしょうか。その辺りが一つ、</p>

	<p>新たな不登校を生まないという答えになってくるのではないかと思います、どうでしょうか。</p>
西田教育長	<p>それはやはり子ども達にとって学校が魅力的だという、そうした場面を学校として設定してるということだと思います。例えば、学校の生徒会も生徒会とは言わずに大統領制になっていて、大統領がいて副大統領がいてという設定で、児童会のためのスペースも広く確保されており、誰でも入ってこれるような場所が設定されています。学校のなかの学級やあらゆるところにそうした場所があって、そこに保護者以外の方、住民の方達も入ってくるとか、学べる仕掛けが多くされています。授業もちろんですが、授業以外にもそうした仕掛けがなされています。だから楽しいんだろうなという印象は受けました。学校経営全体がそういう形になっているので、そのレベルまで行くのは結構難しいでしょうが、やはり子ども達にとって魅力ある、子ども主体ということに向けて、学校が気持ちを変えて全ての人がそうになっていくかということが大きなポイントと感じています。</p>
松尾代表教育委員	<p>新たな不登校を生まないということで、不登校の子どもを持つ保護者を対象に民間が行った調査があり、その質問に不登校のきっかけを尋ねるものがあります。この質問は、文科省の調査にもあるわけですが、一位は「先生との関係」、二位が「学校のシステムの問題」、三位が「勉強は分かるけど授業が合わない」というものでした。</p> <p>不登校が増えてきてるのは、中学校から小学校へと学年が下がってきています。そうすると小学校は、担任の先生とずっと一日一緒ということを考えると、担任の先生と合わないというのは非常に厳しいでしょう。そういう意味では、小学校5、6年生の教科担任制、1、2年生については30人学級、3、4年生が35人学級と段階的に学級の人数を減らしてということも効果としては上がってると思うんですけども、さらにまだ考えなくてはいけないのは小1ギャップというものだと思います、小学校1年生で不登校がいるということです。幼保小の連携というのは教育委員会としても取り組んでいますけれども、まだまだこれから大切な部分だろうと感じています。</p> <p>学校のシステムの問題については、特に中学校の校則があると思います。小学校から中学校へ進んだ時に、校則に取り締まれる感じがあると思いますが、これについては、ここ数年校則の見直しを各学校でやっていただいています。今後、何かそういったことで子ども達の生活に影響が出てくるといいかなというふうに思います。</p>
清山市長	<p>校則であったり授業の進め方、魅力、環境であったりと多くの要素が絡んで結びついているような気がします。</p>
小林委員	<p>今、学校のシステムや授業設計もこれまでの授業感を徹底的に見直してはどうかということ考えると、例えば学校では、昔ながらの同調圧力やそういった指導はやめましょうということは、国の方も主体となってやっています。ただ、果たしてそういうことが、具体的な姿として示されてきているかと考えたときに、先ほどの東浦町立緒川小学校の事例に学んで、個に応じた指導が適切だということ</p>

	<p>とをもっと皆で共有する場が重要なのだと思います。</p> <p>先日、宮崎市ではそういった教育フォーラムがあって、具体的な事項、自由進度学習の事例はこうだということを示すという展開をしています。宮崎市の実践事例として青島小学校の先生が登壇し、大宮中学校の先生達も「私達もやってみました。授業が変わって子ども達が楽しそうでした。」と発表がありました。宮崎市が今やってることは、実は先進的な事例の一つだし、もっと広げた方がいいかなと思います。</p> <p>関連して、不登校の特例校で宮城県の白石南小中学校というところがあります。そこでは、「子ども達が非常に生き生きと活動しています。その一つの目玉として個に応じた学びができ、或いは多様なニーズに応え、誰一人取り残さない授業ができています。」ということが言われていました。まさしくそれは、青島小学校や大宮中学校でやってるような、今までの授業を改革して一人一人のニーズに即して自分の学習計画を立てて、そして授業を進めるということをやることが、結果として良かったといことととても親和性が高いなと思ったんです。私達が今、日常チャレンジしてることというのは、決して無駄なことではなく、もっと広げていっていいなと感じながら話を聞かせていただきました。</p>
清山市長	<p>皆さん共通しているのは、授業のあり方を旧来の一律でみんなが歩調を合わせて進めていくというより、自由進度それぞれの能力に合わせた達成度合いを設定する。できるだけそれぞれの個に合わせた対応、多様な授業というところと違いかもしれませんが、柔軟で子どもにとって魅力ある楽しい授業、学校にしていかなければいけないというところが共通でしょうか。</p> <p>それがなかなか難しいというのは、現場でどのような課題がありますか。</p>
西田教育長	<p>そうですね、この3年間は大きかったと思います。結局、コロナ禍の3年間は、皆さんご存知のように、マスクをしてグループでのお互いの話し合いもできないという無味乾燥な授業をするしかなかったところが、3年目になるとそれにも慣れてきたという状況です。それを元に戻すためには、思い切って学習者主体に授業を変えて欲しい、それを本当に具体的な実践としてやって欲しいというメッセージは伝えているところです。少しずつ変わりつつあるものの、やはり子ども達のニーズにはまだ十分に答えきれていないという感じはします。</p>
清山市長	<p>感染対策とか何かコロナ禍の習慣を引きずっているような部分があるのでしょうか。</p>
西田教育長	<p>インフルエンザが流行っていますのでマスクをつけてはいますが、随分元に戻りつつあるという感じはしています。先日、宮崎小学校に行っても、以前のように子ども達の距離をどうこうということはありませんし、そういう面では戻りました。ただ、ではこれから子ども達に対してどのような授業をしていくのか、特に小学校に比べて中学校では、どちらかと言えばもともと講義型の授業が多いので、中学校の先生方の授業に対する意識を変えろといったところが非常に課題になっていると感じます。</p>
清山市長	<p>グループ学習とか、そうしたことは自由にやっていいような状況でしょうか。</p>

西田教育長	はい、それはどこも大丈夫です。
清山市長	一時期、給食が話題になっていましたけど、それはどうでしょうか。
西田教育長	給食の時間は黙食でということは今はありません。
重盛学校教育課長	黙食という言葉は使ってはいませんが、インフルエンザも流行ってはいますので黙って食べましょうというのはあるかもしれません。ただ、聞いた話では、子ども達がコロナ禍の状況に慣れてしまって、グループを作って食べることに抵抗があるという話は聞いています。
清山市長	学校に行く楽しみの一つとして、給食の楽しみを元に戻すのはどうなのかなと思ったのですが、分かりませんね。
永山副市長	あの、SOSを見逃さないということで言うと、先ほどのお話での調査にあった違和感を感じている先生が学級担任だとすると、誰にSOSを出せばいいのか、誰がどう感じればいいのかというのも大きな課題ですよ。そのあたりを同学校としてシステムを持つのかということは大切なことのような気がします。違和感を持っている相手には、なかなか伝えられないのではないかと思います。僕らでも難しいですから。
西田教育長	小学校では、学級担任を変えてほしいというような要望が結構あります。子どもと先生の関係が悪くなった場合に、一年間はそこで過ごさなければいけないとなるわけです。これって確かに苦痛です。ある学校では副担任制というのを作って柔軟に交代で学級に入るようにしています。一人よりも二人、二人よりも三人、教科でも先生が違うということは、少なくとも高学年では必要になってきたという感じを受けています。
清山市長	子どもが変わったのでしょうか、先生が変わったのでしょうか、それとも誰も変わっていないのでしょうか。そこも辛くしている要因なんではないでしょうか。
片山委員	確かに以前と比べると情報社会なので、保護者も様々なところから情報を取ってらっしゃいます。他の市町村は先生を変えてくれるといった情報が入ってくるかもしれません。
清山市長	保護者同士の情報交換も活発かもしれませんね。
片山委員	学級もそうですが、学校を超えて、この学校はこうだけうちの学校ではこうだとか、なぜ他の学校ではできているのにうちの学校ではできていないのかというような情報の交換は、頻繁にされているということはありますので、そうしたところから学校に対する不信感になることもあると思います。直接話せば分かりあえると思いますが、それがなかなかできない環境にあるとかいうことで、話し合わないまま保護者だけで話が完結してしまって、そうした目で見てしまうというのはあるかもしれません。差があるというのは、特にコロナ禍でオンライン授業ができた学校とできなかった学校があったりしましたので、そういう点は大きいのかと思います。
清山市長	<p>比べるのが簡単な時代ですね。</p> <p>高峰委員、先ほどもう一つお伝えしたいことがあるとのことでしたが、良ければお願いします。</p>

<p>高峰委員</p>	<p>不登校の全国の状況のグラフを見て感じたのが、リモートワークで家にいる保護者が増えたからではないかということでした。お父さんお母さんも家にいるとなると、子どもも外に出るのがちょっとというようにリンクしているのではないかと感じました。そして、子どもは大人の写し鏡なので、お父さんお母さんが家にいるというスタイルが増えれば、このまま数字が下がることはないのではないかという気がしました。学校は、勉強するところと生きる力を与えるところの二点だと思うのですが、オンラインで勉強は教えられるかもしれませんが、生きる力をどう育むかということは、オンラインでどこまでできるのかと考えたところでした。</p>
<p>清山市長</p>	<p>テレワーク率は都市によって差がありますが、宮崎はそこまで高くはないとは思いますが、ただ、不登校の折れ線グラフで言うと全国ときれいに一致しています。先日、学校でも聞いたところによると、家庭のファクターというのは、子どもが学校に行きたくないというような行き渋りがあった時に、良い意味でも悪い意味でも親からの登校刺激が低くなっているのを聞きました。</p>
<p>西田教育長</p>	<p>そのとおりだと思います。</p>
<p>清山市長</p>	<p>それは、考え方の変化だったりということなのでしょう。</p>
<p>高峰委員</p>	<p>先ほどもう一つと話していたことですが、私は経営コンサルタントや起業家を育てるということを長くやっていますが、やはり先が見えないとか志が立たないと起業する人もなかなか前に進めない、自分で能動的に動けないというのはあります。不登校の子どもさんも、大人になって必要なのは生きていく力、行動力、自分で考える力ということが大事です。高校のキャリア教育にも行きますが、なりたい職業というのは銀行員というのあがってきますが、勉強が苦手そちらの方には行けなくても、例えば、起業家には知力よりも生きていく力、自分で産業を興していくということが大事になります。そうした、学校に行かない子ども達こそ、キャリア教育、体験とかそういうことだけではなくて、将来の志を話すということをやって、ではそこに向けてどうやっていくのかというキャリア教育を長いスパンでやっていくと、本人も将来に不安や絶望を感じずに伸びていけるのではないかと感じます。</p> <p>つい最近、若手で文学賞を取った青年がいますが、彼もずっと不登校だったようですが、大学に進んで今は文章を書いて賞を取られました。それは、非常に個性的で誰にもかけないような文章です。彼は、家にいて不登校だった期間中に自分を葛藤しながら作りあげたので、学校にいて知力を上げること以外の道というのも不登校の子ども達にこそ必要なのではないかと思います。そういう意味でのキャリア教育が必要だと思っています。</p>
<p>清山市長</p>	<p>高峰委員が例に挙げてくださったように、学校教育の枠にはまらない子どもさんもいらっしゃるということも事実だと思います。不登校が増えている状況で、そうした枠にはまらない子どもが増えているのか、先ほどの調査にあったように、本当に無気力で家にいても何もしない親も誰もどう接すればいいのかわからない、そうしたところで悩む子どもさんが多いのかなという感じもしています</p>



	が、どうでしょうか。
松尾代表教育委員	<p>一つは、学びの保障ということで言うと、学校には行けるけれども教室には行けない、ではそういう子ども達の学びを校内でどう持つのかということです。学校で、「去年は教育支援教室に通っていたが、今年は校内に支援教室ができた。私はこのまま校外の支援教室に通っていると学校から遠ざかってしまう。学校に支援教室があるんだったら、そちらに行きたい。」ということ話してくれた中学生がいました。やはり校内にそうした環境を整えば、それを望む子ども達もいます。それから、学校には行けないけれども、ここでは私の学びができるという環境、そうした意味では市長部局の方でも様々環境を整えていただいているかと思えます。今後も、多様な機会を作っていくことが大事かと感じています。</p> <p>さらに言えば、家から出られない、学校内外で相談・指導を受けていない児童の割合が38%いるという状況です。保護者も学校も強い登校刺激ができないというジレンマに陥っている状況で、どうアプローチしていくかというのは大きな課題と考えています。</p>
清山市長	不登校児童生徒のうち家から出られない38%の子ども達が、何をされていて、その後どうなっていくのかということころは、どうなのでしょう。
西田教育長	<p>我々の経験上、なかなか会えないです。先生の訪問があると電気を消して過ごす、学校から民生委員・児童委員へも見守りをお願いするも、だんだんそれも拒否されていくというところで、社会全体としてかかわりを持っていくかということが、難しいけれども大切な課題です。</p> <p>市長部局のほうでも様々に取り組んでいただいている状況ですが、その部分をどう支援していくかを探っていくことが重要なことだと考えています。</p>
清山市長	昨年度だけで1,000人を超える不登校の児童生徒がいますが、中学校を卒業して進学しない場合に、どうしているかという調査はありますか。
西田教育長	その調査はなかなかできていない状況です。
重盛学校教育課長	教育支援教室の子ども達は、100%が高校に進学しています。
西田教育長	家から出られないという子ども達は、安否確認も難しい状況にあります。
永山副市長	その子ども達は、夜も出ていないのでしょうか。学校だから出ない、先生だから出ないのであって、夜になったら出ているということもないのでしょうか。
松尾代表教育委員	一概には言えないと思います。ただ、学校から電話をして、何度訪問しても保護者とも連絡がつかないという状況で、とにかく学校と分かったらシャットアウトという状況になります。そうすると唯一の解決策となると学校以外のアプローチになるのではないかと感じています。
片山委員	先日、全国の市町村の教育委員会の方との研究協議会というものがありました。そこで、ある市町村では、繋がっていない子ども達が10%台というところがありました。そこが何をしていたかということ、アウトリーチ支援です。保護者がなぜ学校と連絡を取れないかということ、保護者の方ももともと学校が苦手だったり、コミュニケーションに苦手さがあったりといった背景を持っていらっしゃる方がほとんどです。そうした時に、どこで話をするか、学校以外のどこで話

	<p>しをしたいか、先生ではなくて誰と話をしたいかといった要望を全て聞いて対応するという成果が、10%という数字になっているのだと思います。保護者の要望を聞くというところまで行きつかないこともあると思いますが、一つ一つ丁寧に紐解いていくということ、学校だけではなく様々な部署、機関と連携していくことが大事だと思いますし、妊婦健診から全て繋がってきていると思いますので、そこで繋がりにくいご家庭というのは、どうにかして小中学校の機関に支援に繋いでいくということが必要だと感じています。学校だけで解決できないことは、全て連携して行くということが大事だと考えています。</p>
清山市長	<p>その10%の自治体というのは、学校ではないチームがアウトリーチ支援をしているのでしょうか。</p>
片山委員	<p>学校、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーも含めてチーム一体となって進めているようです。</p>
清山市長	<p>昨日、フリースクールをされている精神保健福祉士の方のお話を聞いたのですが、学校の行き渋りがでてから1～2週間が勝負だとおっしゃっていました。ドクターは1～2か月だろうとおっしゃっていますけども、やはり早期にアウトリーチ、介入をして、長期化する前に何とか解決できた方が良いと思うという話でした。長期化すると状況が悪化するので、早期に対応することが重要だとおっしゃっていました。</p>
小林委員	<p>早期介入するといった時に、ではどんな方法でやるかということは、教員もそれぞれ若い先生が対応することになります。組織としてどう対応するかという相談役、キーパーソンが学校にはいて欲しいと思います。</p> <p>今年2月に横浜市で校内フリースクールをしている山内小学校に視察に行かせていただき学んだのは、人的配置で児童支援専任教諭という方がいらっしゃいました。その方は、指導力も高く人としても広い知見をもっていらっしゃる方で、学校としても中心となる方でした。そうした方に児童支援専任教諭を委嘱して、専念していただくという環境を整えていました。そうすると、学級担任と合わないといった声も、専任教諭の方が拾えるという状況になるわけです。この学校は、クリニックともつながっていて、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、クリニックと連携する、そこを専任教諭の方がコーディネートするというようなことでした。可能であれば、そうした人員配置というのも必要なのではないかと考えていただけると良いのではないかと思います。</p>
西田教育長	<p>確かに小学校の先生は、授業をずっとしなければならぬので、子どもを迎えに行きたいと思っても動けない状況です。そうした時に、スクールアシスタントが週2回入ってくれていますが、なかなか難しいのが現状で、なおかつ人を増やすというのも難しいところはありますが、我々としてはどうそこを支援していくかが課題としてあります。</p>
永山副市長	<p>以前は、保健室の先生や図書室の先生がそうしたことを察知して、場合によっては相談に応じてたということも以前はあったと思いますが、それでは間に合わない、きちんと経験値を積んだ方が対応していく必要があるということですね。</p>

清山市長	家から出られない子どもたちの中学校卒業後がすごく心配で気になりますが、福祉部としては何かありますが。
田村部長	<p>8050問題とよく言われますが、長年引きこもりの子どもを親の年金や家族の援助で生活をしていると、親が亡くなり、家族の方の援助も難しくなってくると、最後に生活保護を受けるしかなくなるということになります。</p> <p>福祉部としては、ひきこもりの連絡協議会というのがありますし、自立支援センター「これから」で、ひきこもりのファースト窓口として相談を受けるようにしています。今年度に入って、「ひだまり」という形でご家族をお呼びして話を聞いたり、講演会を行ったりというような取組を始めています。今年7月には社会福祉士の資格をもった会計年度任用職員を雇用して、そうした取組を始めたところです。子どもさんであれば、教育委員会とも連携して、居場所づくりコラッジの案内もできますし、就労の関係に結び付けていく支援もできるかと思いません。</p>
清山市長	<p>ひきこもりは、実態と調査推計と解離があって、本当のところが見えにくいということもあります。そうしたことも懸念しています。</p> <p>最後に皆様からご感想を伺いたいと思います。</p>
西田教育長	不登校からひきこもりまで、その人の人生の中で初期にどれだけ対応していくかということが非常に大切なんだと思います。今日良かったのは、こうして市長部局の部長さん方も一緒にいろんな話をさせていただいて、横の連携や繋がりながらを持って、実態をお互いに情報共有できるということは、これからも大切にしていきたいと思います。そういう中で、教育委員会の取り組みも進めていきたいなと考えています。
松尾代表教育委員	不登校というものが一過性終われば良いですが、これは本当に長引いていくという点を非常に懸念しております。今後とも、教育委員会、それから市長部局の取り組みがありますが、不登校というものは教育・福祉を絡めた市役所全体としての取り組みになっていくような大きな問題だなというふうなことを感じました。
小林委員	<p>先日私の所属する宮崎大学生と、オンラインでSOSの出し方という授業に絡んで、SNSを通していろいろとぶつかっていることがあるよね、それをどう解決していくかということ協議しました。</p> <p>中学生は、やはり大学生とかと触れ合うというのはすごく新鮮なんです。従って、これから先不登校を生まないといったこともありますが、一方で、様々な支援に対しても、そうした若い力を借りながら進めていく、広げていくということもいいのかと感じました。</p> <p>いずれにしても福祉部、子ども未来部、健康管理部、いろんな方々のお話聞きながら、やはり組織展開を改めてやることの重要性を感じたところです。</p>
高峰委員	不登校が一過性に終わるのか続いてってしまうのかは、もともとその子が持っている素養で決まっているものではなくて、その期間中そうってしまった後に、誰に会って誰がそれを見つけて、その子のことを一対一で一緒に考えてというこ

	<p>とをやっていけるかという出会いだと思います。私は、キャリア教育という形で、様々な選択肢あるよといったことを一緒にサポートできればいいなというふうに思います。</p>
高峰委員	<p>不登校の子ども達と何年か関わった経験がありますが、行けなくなって、行かない選択をしたという子ども達がほとんどです。その行きたくないことがあった時に気づける力、相談をしてもいいんだよという大人達、そして相談してもよいと思える子ども達という姿が、その子どもが大人になった時に、自衛力とか支援力というところで合致していくのかなと感じています。行きたくないことがあった時に誰がどうサポートして相談を受けられるか、行けなくなった時に誰がサポートできるか、行かない選択をした時に、みんなで力を合わせて連携を取りながら、その選択は、子ども達が苦しんだ結果にした選択だということを大人達が知ったうえで、環境を整えることが何よりも大事と思っています。</p> <p>子ども達は、生まれてきた時から学校に行かない選択をして生まれてきたわけでもないですし、皆さん幸せになるために生まれてきてますので、しっかりと環境を作ってあげるのは大人の仕事だと思いますので、微力ながらその一助になればいいなと考えています。</p>
永山副市長	<p>最後の引きこもりの問題も含めてすごく難しいなと思いながら話し合いに参加しました。それでも、どの話題にも先例があるというか、いい事例があるというのも委員の先生方話されたので、やはりいろんなところで学んでみて、自分達の今までの取り組みの延長線上ではないところで、何ができるんだろうということを考えていくことで対策ができるのではないかなというふうに改めて感じました。</p> <p>市長部局としてしっかり連携して、政策化、事業化できることは、しっかり取り組んでいく必要があると改めて思ったところです。</p>
清山市長	<p>最後に私からですけれども、不登校で昨年度1,000人規模であったということですが、以前から学校という既存のシステムにはまらない子ども達もいらっしゃるんだろうとは思いますが。ただ、やはりこの数年ずっと数字が上がってきてというのは、子ども達にいろいろな変化が起きていて、いろんな形でSOSが発せられているんだろうと思いますし、その子ども達のその後の長い人生を考えると、やはりもっと支援を寄せていかなければ、地域社会全体にとって将来危うい状況になるんじゃないかと強い懸念を持っています。今日は、各部局長の皆さんも一緒に情報共有をさせていただきましたので、市としても教育委員会と一緒に連携して、取り組みをさらに前に進めていきたいと気持ちを新たにしました。本日はどうもありがとうございました。</p>
堀企画総務課長補佐	<p>様々なご意見、意見交換ありがとうございました。</p> <p>それでは、以上を持ちまして令和5年度総合教育会議を終了いたします。</p>